

## 基礎・基本の定着から身近なことを英語で表現する力を育てる工夫

所属 伊野町立神谷中学校  
氏名 山 中 恵 美  
R G J H 2

## 1 研究の背景

本校は、生徒数33名3学級の小規模校で赴任して今年で3年目になる。生徒たちは非常に素直で優しく、真面目で落ち着いた学校生活を送ることができている。赴任当初の授業では英語を話さない、話そうとしない生徒や話し掛けても極端に恥ずかしがったりする生徒も多く、まずは英語の授業に向かう態度や話すことへの抵抗感を無くすことから始める必要があった。

現在、生徒たちは会話活動に積極的で、元気に発音したり発表したりすることができるようになった。また、分からないところを教えあい、助け合う姿勢や自信を持って授業にのぞむ生徒やすすんで英語で話そうとする生徒もみられるようになってきた。しかし、中には英語を話すことは好きだが、読めない、既習の文を使って自己表現を書かせると話していた文も書けないという生徒も少なくない。そこで、英語で身近なことを表現することができるようになるにはどのようにすればよいか、基礎・基本の定着を目指した活動で理解した表現を、自己表現する時に使えるようにするにはどうすればよいかを探りたいと考えている。

## 2 リサーチクエスト

基礎・基本の定着を目指した活動をどのように発展させていけば、生徒が身近なことを表現することができるようになるか。

## 3 予備調査

## 予備調査1 授業観察の結果

- (1) ペアやグループでの活動には非常に積極的に取り組むことができ、会話活動にも積極的である。しかし、その活動を応用させたり、話したことを自分のこととして書かせると書けないことが多い。
- (2) 英文を書くことにおいては、主語や動詞の語順が不正確であったり、時間や場所をあらわしたりする句の位置の誤りや前置詞が欠落することが多い。
- (3) 言えない、書けない語があると、調べたり言いかえたりすることができず、分からないとあきらめてしまうことが多い。

## 予備調査2 英語力を示すデータ

- (1) 観点別到達度学力検査(CRT)全国通過率との比較で、下回っている項目をスキルごとにすべて挙げる  
と下記のとおりである。問題とする「書くこと」の結果は予想よりよいものであったが、この検査がマーク

技能	内容	全国比(全国=100)
「聞くこと」	簡単な英語を聞き取ること	99
「話すこと」	基本的な話し方を理解すること 考えや気持ちを正しく伝えること	71 93
「読むこと」	文章のあらすじや重要部分の理解	75
「書くこと」	文字等の知識を身に付けること 伝えたい内容を考え正しく書く	94 97

シート方式であることや問題の内容が自由記述式でなく、並び替え等であったことが結果に影響していると思われる。「話すこと」の「基本的な話し方を理解すること」の問題は、文の句切りを答えるものであった。また、「読むこと」の文章の内容理解が非常に弱い点である。

- (2) 第2回実力テスト、期末テスト、Writingの宿題 (資料 参照)

## 4 仮説の設定

仮説1：新出文型の導入時に「身近な話題」をたくさん取り入れ、その話題について、既習の文型を用いて生徒とコミュニケーションするなかで、その新出文型の意味や用法を予測させれば、その表現を使いやすくなる

仮説2：生徒のペアでの練習活動に既習にこだわらず、身近なことを表現するための語や語句をたくさんインプットしたり、つねにプラスして質問したり答えたりする活動を続けていけば、自己表現がスムーズにできるようになる。

仮説3：英文をリーディングする時にスラッシュリーディングを意識づけ、意味を句のかたまりでとらえさせることを継続すれば、英文の語順の理解が深まり表現することにつなげることができる。

仮説4：段階を踏んで、話したり書いたりする活動から、次第に自由に話したり書いたりする活動を定期的に

行えば、コミュニケーションの手段として身近なことを表現することができるようになる。

## 5 計画の実践

- (1) 仮説1：新出文型導入時に提示する例文やドリル練習する例文に身近な人物、クラスメートや学校の先生の実際の行動を取りあげた。さらに重要文をノートに書きまとめる際にも友人、家族等身近な人物のことや自分のことを新出文型を使って書かせた。
- (2) 仮説2：ペアワークへの取り組み（資料 参照）  
Daily Conversation 既習の文や慣用表現を覚えるためにペアで会話するドリル的な要素の高い活動。  
ペアワークシート(基礎基本の定着のための覚える活動)今回3年生には田尻吾郎先生のワークシート「ど  
どいプリント」にもペアワークで取り組んだ。  
早読み、リーディングマラソン
- (3) 仮説3：英語の語順が分からないために、表現する時にも日本語的な並びで単語を書くものがあることか  
ら、スラッシュリーディングを試みた。チャンクごとにスラッシュを入れさせたり、「～が・・・したーを」  
という直訳をするものである。読み方も英語を日本語、日本語を英語に訳させたり、シャドーイング、ルッ  
ク&アップで読ませるなど変化を持たせた。
- (4) 仮説4：「Let's Write!」に取り組んだ。既習の文法事項を使い修学旅行の報告や、身近なものをALTの  
先生に紹介文を書くというものである。スピーキングテストはALTの先生と約3分間会話するもので、今年  
度は2学期、3学期の2回予定している。

## 6 結果の検証

- (1) 「Let's Write!」：「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」「表現の能力（書くこと）」をみるテス  
トとして、1学期の終わりと2学期の終わりに全学年行った。（内容については資料 参照）生徒たちの  
書くことの活動に対する取り組み方が明らかにかわった。
- (2) スピーキングテスト：「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」「表現の能力（話すこと）」をみるテ  
ストとして、2学期の終わりに全学年行った。（ALTの評価表と生徒の自己評価表 資料 参照）ひとり  
一人の会話はテープに録音し、後日評価するときの資料としている。また3学期のスピーキングテスト結  
果と比較を考えている。
- (3) 授業ふりかえりカード：次のようなアンケートを2学期の授業の最後に全校生徒32人に行った。（全内

容は資料 参照）表の中の数字は人数である。3の活動は2学期に行った様々な活動をまとめて楽しかつ

	よかった とも思う		よくなかった まったく思わない	
	4	3	2	1
1. 学習内容がよく理解できましたか	12	16	3	1
2. 先生の指示や説明はどうでしたか	18	14	0	0
3. 活動は楽しかったですか	14	15	3	0
4. 英語を書けるようになりましたか	8	17	6	2

う。「2学期で一番楽しくできた活動を書いてください」という記述の質問には、スピーキングテストと  
答えた生徒が32人中17人であった。

## 7 成果と今後の課題

今回のアクション・リサーチで実践できた時期は2学期だけで、しかも2学期は行事も多く、仮説2、3の  
実践を計画的に行えなかったこと、また検証するためのデータをとったり活動を改善しながら行うことができ  
なかったことが反省点である。現時点ではまだ、仮説が検証できたとは言えず、3学期も継続して行い実践し  
なければ具体的な目に見える結果は得られない。アクション・リサーチへの取り組みで生徒が変わったかとい  
うと自信をもって答えられないが、明らかに言えることは私自身の授業に向かう姿勢や意識、生徒に対する認  
識が変わったことは確かである。生徒のスピーキングテストの感想や、アンケートの結果から話すこと、書く  
ことに対する関心、意欲が高いということと、学習したことが生かされ、達成感を得られる活動が楽しいと思  
じられることが分かったことは成果であると言える。課題としては多くのことが残された。ペアワークでの実  
践やスラッシュリーディングが話すこと書くことにどんな影響を与えるか、その検証方法を検討しなければなら  
ない。リサーチクエスションにある基礎・基本を目指した活動を発展させていくということも課題として大  
きく残された。日々の授業のデータを細かく記録、残していくことも今回できていなかった。何かを行ったか  
らすぐ成果があらわれるというものではないだけに、日々の継続した活動の取り組みは大事にしなければなら  
ないし、3学期は、数時間毎に振り返り活動自体も改善していく必要があると感じている。